



## ユニバーサルデザイン

製品や情報、建物、環境などを誰でも使いやすいよう、あらかじめデザインする考えかた。また、そのようにデザインされたもの。たとえば何かのサービスを利用するときやどこかの施設を訪れるとき、年齢や性別、国籍、言語、能力、文化によって、そのサービスや施設を利用できる人、利用できない人、利用しづらい人に分かれてしまう社会は快適とはいえません。そこで生まれた考えが「ユニバーサルデザイン」です。

「ユニバーサル (universal)」は「全員の」「万人の」「共通の」といった意味を持ちます。1959年ごろから北欧を中心に「ノーマライゼーション」という考えが広まり、同時期に米国でも「バリアフリー」という考えが広まりました。こうした流れの中で、ユニバーサルデザインという考えが1980年代に生まれました。このことばを初めに使ったのは、米国ノースカロライナ州立大学の教授であり建築家でもあったロナルド・メイス (通称ロン・メイス) 氏です。メイス氏は、車いすによる生活を送っていましたが、障害者にとって使いづらいところが見つければその都度、直すという考えがあまり好きではありませんでした。自分が特別扱いされることに抵抗があったのです。そこで、あらかじめ、誰でも使いやすいようにデザインしておけばよいのではと考えたのです。メイス氏は、ユニバーサルデザインのあるべき形をまとめた「ユニバーサルデザインの7原則」のなかで、「特別な設計やデザイン変更を行うことなく、可能な限りすべての人が利用できるよう製品や環境をデザインすること」と定義しています。

ユニバーサルデザインの概念はさまざまな分野に浸透し、つくり手が一方的に製品や建物を設計する時代から、利用者の視点に立って設計する時代へと変わるきっかけともなったのです。



右利き、左利き、どちらの人にも使いやすいようにデザインされたカッター「フレノス」  
© コクヨS&T (株)



文字の色やサイズ、背景色などを利用者が自由に設定できる機能を備えたソフトウェアも増えている

もっと知りたい!



### ≫ ノーマライゼーション normalization

障害者と健常者が一緒に生活できる社会をめざすこと。1950年代にデンマークの社会運動家、バンク・ミケルセン氏が提唱した考えです。当時、知的障害者が特別な施設で大勢で生活し、時間も行動も制限されていた状況に疑問を感じ、誰もが同じ日常を過ごせる社会こそがノーマルな (正常な) 社会であると世間に訴え、のちにこの考えをスウェーデンのベンクト・ニリエ氏がまとめ、世界へと広まりました。

### ≫ バリアフリー Barrier Free

高齢者や障害者が快適な日常を送れるよう、障壁となるものを取り除いていくこと。たとえば、廊下に手すりをつけたり、階段の横に傾斜を設けたり、バスの乗降口の床を低くしたり、駅や道路に点字ブロックを敷いたりといった工夫や改善を施していきます。一般に「バリアフリー」は、既存の製品や施設にあとから修正を施すことをさしますが、「ユニバーサルデザイン」は、初めから、あらゆる人を対象としてデザインすることをさします。

### ナナゲンソク ≫ ユニバーサルデザインの7原則

ロナルド・メイス氏がユニバーサルデザインのあるべき形を7つにまとめたもの。「誰でも公平に利用できる」「柔軟性がある」「シンプルかつ直感的に利用できる」「必要な情報がすぐにわかる」「ミスをしていても危険が起らない」「小さな力でも利用できる」「じゅうぶんな大きさや広さが確保されている」の7つです。このように、わかりやすく汎用性のあるガイドラインを設けたことが、ユニバーサルデザインの普及に貢献しました。